80　けたいかみ

問　愛宕山の虚空蔵堂は、丑・寅生れの人が特別に信仰するのだそうですが、それは何故ですか。また、これに類した[1]ことが、それ以外の人の場合にもあるのでしょうか。

答　それは、生れ年の十二支によって、その人の守本尊[2]がきまっており、特にそれを信仰して一生の加護を求めるという風習の一つであります。このことは、昔から広く一般に行きわたり行われてきたものです。それは、仏教的要素を主体に、民俗的な神や運勢の思想が混入・関連して形成されたものといわれます。生れ年と守本尊との関係は、次の通りになっています。

（生れ年）	（守本尊）
子	観音[3]
丑・寅	虚空蔵[4]
卯	文殊[5]
辰・巳	普賢[6]
午	勢至[7]
未・申	大日[8]
酉	不動[9]
戌・亥	八幡[10]（阿弥陀[11]）

仙台弁では、これを「けたいがみ」・「けで一がみ」といいます。「全国方言辞典」（東条操編）に『＜けたいがみ＞各人の守り神、守本尊、宮城』。「仙台の方言」（土井八枝）に『＜けたいかみさん＞「わたしのけたいかみさんお文殊さんでござりすお」（私の守り本尊は文殊様ですよ）』。「仙台方言考」（真山青果）に『＜けたいがみ＞生年の干支によりその人を庇護する神仏をいふ。丑寅虚空蔵、戌亥八幡の類にて、虚空蔵をけたい神とする者は一生鰻を食はずなど言うて、食品にもそれぞれ禁物がある。』などと記されています。「けたい」とは「卦体」に由来する語のようです。卦体とは易〔えき〕の卦に現われた算木の様子、すなわち占いの結果であって、転じて縁起の意となりました。

けたい信仰の対象となる守本尊の所在場所如何は、もとより問うところではありませんが、仙台では丑寅の愛宕山虚空蔵、酉の三滝不動・中山鳥滝不動[12]などは中でも多数の信者を集めたものでした。なお、これについては、「宮城県仏教史」（佐々　久）に次のように記されています。

『

子	千手（縁日七日）	元寺小路	観音堂[13]
丑寅	虚空蔵（十三日）	向山	虚空蔵堂
卯	文殊　（二十五日）	茶屋町	文殊堂[14]
辰巳	普賢　（二十四日）	向山	愛宕神社[15]

午　勢至　（二十三日）　北目町　二十三夜さん[16]

未申　大日　（八日）　柳町　大日堂[17]

酉　不動　（二十八日）　三滝ー新伝馬町　不動堂[18]

（明治四年新伝馬町に移す）

戌亥　阿弥陀（十五日）　八幡町　大崎八幡[19]

〔中略〕阿弥陀は八幡の本地仏なる故同じとされた。

これらの神仏には真言宗・天台宗の寺院か修験が別当をしており、祭礼にはその生年に当る者がよく参詣した。』

注(1)　虚空蔵菩薩（坐像仏身1尺5寸、蓮台5寸、岩1尺、計3尺、作者・年代不明）を本尊とし、大満寺がその別当寺として祭祀供養を行ってきた。明治以来台帳面においては独立仏堂として取扱われていたが、昭和16年12月、大満寺所属に帰した。古来、特に丑寅年生れの人々の守護仏として信仰を集めてきた。境内に放生池又は御多羅瀬池と称する小池があり、清水が湧出して絶えることがない。丑寅の人は鰻を食わないという習慣があり、この池に願望成就のため鰻を放生〔ほうじょう〕することが行われている。祭典は5月13日で、正月及び9月の13日には大祈禱会が催される。虚空蔵像は、同じく大満寺境内の千体仏と共に、もとは仙台城本丸の位置にあったが、仙台城構築の際、経が峯に移され、更に万治2年〔1659〕忠宗廟感仙殿を経が峯に造営するに当って愛宕山に移されたものである。造営奉行は原田甲斐であった。現存の御堂は当時のもの。別当寺である大満寺もまた共に移動してきた。故に、中世の古文書に現われる「宮城郡虚空蔵城」「宮城郡虚空蔵栖」は、後の仙台城の地を指すものである。また、経が峯を元虚空蔵というのは、虚空蔵堂の一時所在したことによるものである。なおこのことについて古地誌「仙台鹿の子」に『虚空蔵堂は慶長年中御本丸御築の時当山〔愛宕山〕へ移さる』とあるが、中間の経が峯移転について記していないのは正しくない。正保2・3年〔1645～6〕「奥州仙台城絵図」（斎藤報恩会所蔵）には、経が峯に虚空蔵堂が見えており、此処から更に愛宕山に移されたことについては、「雄山公治家記録」巻之中に次の通り明記されているからである。『同年〔万治二年〕経峯ヨリ虚空蔵堂并ニ別当大満寺ヲ愛宕ノ西ヘ移サレ、本堂、長床、鐘楼、大満寺共ニ造営セラル。是義山公御廟宇ヲ、経峯虚空蔵ノ地ニ建ラルニ就テナリ、惣奉行〔原田甲斐宗輔等二名〕、御普請奉行等ハ御廟建立ノ役人同ク務ムト云々。』

注(2)　各人をそれぞれ一生涯加護する特定の仏菩薩をいう。本来は天台宗・真言宗で行う結縁灌頂〔けちえんかんじょう〕の際、投華得仏という方法で決められたものである。これは曼荼羅〔まんだら。諸尊の悟りの世界を表現したもので、諸仏・菩薩等が網羅的に描かれている〕に花を投げさせ、花が当った曼荼羅上の諸尊とその信者を宿縁あるものとして縁を結ばせ、その秘法を授けるためであった。後に守本尊信仰は宗派を越えて流行するので、

守本尊の選び方も随意になって行った。やがて、十二支と守本尊との組合せが案出され一般化してきたのである。

注(3) 観世音。菩薩の一、菩薩は衆生済度のための大乗仏教における信仰の対象となる仏陀の候補者、代行者。観世音は、大慈大悲を以て衆生を済度することを本願とする。

注(4) 智慧・功徳の広大無辺なことが虚空即ち天を蔵するが如き菩薩。

注(5) 智慧を司る菩薩。わが国の民間では、子供に智慧を与えると信じられる。

注(6) 一切菩薩の上首として、常に仏の教化・済度を助ける菩薩。

注(7) 智慧を表わす菩薩。即ち智慧光を以てあまねく一切を照らし、三途〔さんず。三悪道〕を離れ、無上力を得させるという。

注(8) 大日如来。如来とは仏の十号〔仏の徳をたたえた十種の呼び名〕の一。宇宙と一体と考えられる汎神論的な密教の本尊。その光明が遍く万物を照らすところから遍照または大日という。

注(9) 不動明王。大日如来が一切の悪魔を降服するために、忿怒の相を現わしたもの。不動尊ともいう。

注(10) 応神天皇を主座とし、弓矢の神として尊崇された神。古来広く信仰されたもので、奈良時代には神仏混淆し八幡大菩薩と称せられて強い仏臭を帯びてきた。

注(11) 西方にある極楽浄土を主宰する仏陀の名。信ずる者は死後その世界に生れかえるという。東アジアの浄土教諸派〔わが国では浄土宗・時宗・真宗など〕の本尊とされる。阿弥陀如来。弥陀。神仏混淆の上では八幡の本地仏とされた。

注(12) 荒巻字川平にあり、伊達綱村が中山に鹿狩りをした時、山から沢を下ってきたところ、滝の附近に美しい1羽の鳥が現われた。近づいて見ると、それは鳥ではなく1本の幣束であった。そして、その滝には石仏が祀られていたので、以後は鳥滝不動とせよと命じた。それ以来鳥滝不動は、伊達家及び酉年生れの人々の守本尊として、厚く信仰されてきた。中山地区一帯には48滝ありといわれ、お留山として動植物〔みやぎのはぎの保存繁殖なども〕が保護されるなど、自然がよく保たれてきたところであった。しかし、昭和39年から始まった大規模な団地造成によって、環境は全く一変してしまった。

注(13) 光明皇后の御持仏と伝えられる聖観音菩薩を本尊として祀る。寺小路の観音さんとして古来市民の信仰厚く、殊にも正月7日の暁参りは、木下薬師と共に「朝観音夕薬師」として、大いに賑わったものである。堂は昭和20年7月10日の戦災で焼失したが、満願寺境内に再建された。仙台33か所観音の第9番で、戦災で焼けた第8番の元大仏前観音堂の正観音が此処に移され、すぐ隣に並んで祀られている。満願寺は天台宗で成就山と号する。天平中〔729～748〕白河に創建、信夫郡に移ってから伊達家代々の崇敬が厚く、岩出山を経て仙台に移って来た。当初、光明皇后御持仏と伝えられるこの観音を寺の本尊と

したが、後に観音堂の本尊として遷し祀るようになって今日に至ったのだという。

注(14) 茶屋町南鷲巣山〔文殊山ともいう〕にあり。本尊は賢淵に埋もれていた木像の文殊菩薩である。嶺八兵衛が夢告によって発掘したといわれ、伝教大師作日本三躰の一と称する尊像であったので、寛永3年〔1626〕3月堂宇を建立してこれを祀った。祭日は陰暦の6月24日と9月25日であった。

注(15) もと米沢にあったが、伊達氏と共に、岩出山を経て仙台に移り、始め元寺小路満願寺の地にあったのを、後に今の向山に移し、天台宗誓願寺を以て別当たらしめたという。この神社が鎮座することにより、向山のこのあたりを愛宕山と呼ぶ。古来仙台における惣鎮守として士民の崇敬が厚かった。慶長8年〔1603〕、慶安3年〔1650〕、元禄7年〔1694〕の古い棟札が残っている。誓願寺は明治初年、神仏分離の際廃寺となった。

注(16) 北目町南端、上染師町との境、東側にあり、北目観音とも、二十三夜堂とも呼ばれている。慶長6年〔1601〕城下町が割られたとき、北目城の城下町がここに移され北目衆の北目町と称された。本尊は勢至観音菩薩の銅像で、別当は天台宗北目山満福賢聖院である。毎月23日を縁日とするので二十三夜堂ともいう。戦災に遭って堂内に並んでいた室町仏も堂も仁王門も全焼したが、本尊は無事に持出され、戦後町民の浄財によって再建された。昔の北目町〔「きたんまち」と呼んだ〕には、極月　〔陰暦12月〕御日市や伝馬の特権が与えられていた。賢聖院が宿場寺院と称せられ伝馬役を務めたが、毎月20日から25日までの北目町受持伝馬期間の最中23日に縁日が行われたことであり、二十三夜堂は一入大勢の参詣で賑わった。明治初年までは、国分町と共に仙台第一の賑やかな町であった。なお、仙台城下の伝馬町は国分町・北材木町・北目町・新伝馬町のいわゆる4伝馬町であり、藩御用の輸送即ち伝馬役をつとめた。その分担は「朔日〔ついたち〕は国分町よ十二材廿日北目に二十六新」といいならされた通り、国分町が1日から11日まで、北材木町が12日から19日まで、北目町が20日から25日まで、新伝馬町が26日から月末までであった。

注(17) 柳町大日横丁北西角にある。柳町は伊達・米沢・岩出山を経て仙台へと伊達氏に従ってきた町人町の一、柳町居住者によって祀られている祠堂。柳町は開府当時は今の元柳町に置れたが、城下町南方拡張の寛永4・5年〔1627～28〕頃現在の地に移されたもので、昔は元柳町に対して今柳町と呼んだ。大日堂は、もと柳生院教楽院と号した山伏で、大日如来を本尊としたので大日堂と呼ばれてきた。境内の脇を柳町から南町通へ抜ける横丁を教楽院丁、俗に大日横丁というのはこれによる。伝説によれば、慶長6年〔1601〕正月から開始された仙台城下町割の縄張に使用した縄を集めて焼いた灰を埋め、その上に創建したものという。大正8年3月2日の南町大火で全焼、更に昭和20年7月の戦災で堂宇記録一切が烏有に帰したので、由緒を知ることができない。明治5年の太政官布告で修

験が廃止となるまで天台修験（本山派）に属していたという。祭典は陰暦６月７・８の両日。

注(18) 新伝馬町にあり、本尊は東二番丁住人彫刻師中川兵吉作不動明王木像１体、他の五大明王はもと南光院丁の修験南光院にあったものという。天保の頃、馬宿加藤の女房お竹が、三滝不動に眼病平癒の祈願をしたところ、その満願の日に水中から不動像を発見、持帰って自宅に安置して礼拝をつづけ、明治４年に祠堂を建てて祀っだのが始まりだという。昭和２０年７月の戦災で焼失、戦後コンクリート造の堂宇に改築された。祭典は毎年７月２７・２８両日、縁日は毎月２７・２８の両日、本尊の開帳は酉年に行われる。

注(19) 八幡町に鎮座する。延暦２０年〔８０１〕坂上田村麻呂の蝦夷征伐の際、胆沢郡八幡村に八幡宮を勧請〔かんじょう〕し、その後天喜５年〔１０５７〕源頼義・義家父子が安倍貞任征伐をするに当り、戦勝を祈って剣と鏑矢〔かぶらや〕とを奉納し、文治５年〔１１８９〕源頼朝も平泉征伐に際して奉幣しているなど、由緒ある古社であった。その後、源義家１１世の孫大崎伊予守家兼が陸奥５郡〔遠田・志田・玉造・加美・黒川〕を領することになった時、その祖頼義が崇拝した社であるというので、永正８年〔１５１１〕これを遠田郡八幡村〔今の田尻町八幡御殿崎〕に遷祠した。天正１８年〔１５９０〕大崎義隆が秀吉に滅ぼされ伊達氏の所領に入ってから、政宗は慶長５年〔１６００〕これを岩出山に遷し、同７年更に仙台の城北高地に遷し、同９年秋社殿の造営を始め、１２年落成したので、先に岩出山に遷して置いた米沢成島〔なるしま〕八幡と共に合祀した。大崎八幡とも米沢八幡とも呼ぶのはそのためである。また遠八幡とも称するのは、仙台城から割に遠くに鎮座するからといわれる。なお、遠田郡田尻の旧地には今も大崎八幡が祀ってあり、米沢の旧地には成島八幡も現存している。この時造営された社殿の内、本殿・拝殿・石之間等は現存最古の桃山式建築として、明治３６年国宝に指定された。成島八幡の別当寺は竜宝寺で、米沢以来奉仕しており、仙台遷座後は社東に伽藍を建てて別当した。竜宝寺は真言宗で、一門格に列せられていた。明治初年の神仏分離の際には、竜宝寺４５世永憲は帰正して大崎清美貫寛と改め、大崎八幡の祀官となった。その他の社僧６名も帰正して神職となっている。大崎八幡の祭日は陰暦８月１５日であったが、現在は新暦９月１５日に行われる。

資料　仙台方言考（真山青果）
仙台市史第６巻
宮城県史第１２、２０巻
宮城県仏教史（佐々　久）
仙台の方言（土井八枝）